

探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：江田島市立能美中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
江田島市立鹿川小学校	8	100人
江田島市立中町小学校	8	115人
江田島市立能美中学校	6	122人

(R3.11.1現在で記入)

1 指導上の課題

- 「平成31年度全国学力・学習状況調査」児童・生徒質問紙「総合的な学習の時間では、自分の課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいると思いますか。」に対する肯定的評価は、能美中79.2%（全国61.5%）、中町小77%、鹿川小95%（全国65.7%）と、本校区の児童生徒の総合的な学習の時間に対する自己評価は全国値と比較すると高い。令和2年度の能美中独自の生徒質問紙調査では、「総合的な学習の時間は各教科で学習したことを生かし、充実している。」に対し、肯定的評価が95.1%と非常に高い。しかし、各種学力調査の結果は、3校とも全国平均、県平均と同等か、やや低く推移しており、特に複数の資料を読み取って答えたり、条件に応じて論理的に説明したりするなど、「活用」の問題で課題がある。総合的な学習の時間が、真に児童生徒の課題発見・解決学習となりえていないことが原因の一つであると考えられる。
- これまで、3校がそれぞれ独自の総合的な学習の時間の全体計画に基づいて指導を行ってきたため、小学校間で学習内容が異なる、中学校との重複があるなど、小中を見通した系統的なカリキュラムにはなっていない状況である。

2 研究の概要

(1) 研究テーマ及び研究のねらい

①研究テーマ

児童生徒の探究的な学びが生まれる授業の創造
～小中9年間を見通した生活科・総合的な学習の時間の在り方～
[小中連携教育の目標]
ふるさとを愛し、ふるさに学び、ふるさに貢献する児童生徒の育成

②研究のねらい

小中9年間で育てたい資質・能力を、系統的に育むことができる、プロジェクト型学習の手法を取り入れた生活科・総合的な学習の時間のカリキュラム開発を図る。

(2) 資質・能力の設定について

児童生徒の実態に基づき、生活科・総合的な学習の時間で育成したい資質・能力を次の三つに設定した。

主体性	自ら目標を設定し、その達成に向けて考え、判断し、探究活動に取り組もうとしている。
伝え合う力	探究的な活動を通して、異なる意見や他者の意見を受け入れ尊重し、協働して新たな価値を生み出そうとしている。
やりきる力	課題解決の過程においてあきらめず取り組み、最善解を導き出すことができる。

(3) 取組について

【探究的な学習の充実に向けての取組】

- 小中9年間で育てたい資質・能力の明確化し、ルーブリックを作成した。
- 校内研修において、生活科・総合的な学習の時間を軸とし、単元構想シートを用いて「本質的な問い」による単元計画を協議した。

- サテライト講座「充実させよう！探究的な学習」を中学校区で受講し、探究的な学習の充実に向け、小中が連携し、PBL型学習の考え方を参考とした生活科・総合的な学習の時間の単元開発・実践に係る研修を行った。
- 目指す児童生徒像を実現するために、資質・能力の育成を念頭においたカリキュラム・マネジメントアンケートを実施し、全教職員の共通理解を図った。

【小中連携の取組】

- 各校の研究主任がリモートミーティングを活用し、推進協議会の事前打ち合わせ等を行った。
- 各校の研究授業実施日を共有し、研究主任が授業参観や協議会に参加することで、指導の連続性、系統性の理解を図った。（小学校⇄中学校）

【資質・能力の評価】

- 毎時間の授業において、児童生徒に振り返りを行わせることで、自己の目標や単元の目標の達成度を自覚させ、見通しをもたせることをに取組んだ。
- 児童生徒の実態と生活科・総合的な学習の時間で育成したい資質・能力について、全教職員の意見を取り入れながら、以下のルーブリックを作成した。「主体性」においては、児童生徒の成長を長期的に捉えた大枠で作成し、単元と課題に沿って成長段階を確認しながら設定できるようにした。

【小中9年間の生活科・総合的な学習の時間で育てたい資質・能力】

資質・能力	低学年	中学年	高学年	中1	中2	中3
【主体性】 やる気をもって自分から進んで主体的な姿勢 課題発見	目的意識をもって、進んで活動し、結果を振り返り、新たな課題や生活とのつながりを見つけている。			自ら課題を見つけ、さまざまな手段で情報を集め、活動を進める上で起こりうる課題を予測しながら課題解決の計画を立て、学びの体験を常に振り返りながら探求行動している。		
【伝え合う力】 協働 受信+発信	相手を見て黙って聞く。	反応しながら聞く。	相手の言いにくいことを考えながら聞く。	相手の考えを理解し、自分の考えを比較しながら、傾聴している。	相手の考えを理解し、自分の考えとすり合わせながら、傾聴している。	相手の意図や気持ちを読み取りながら傾聴し、正確に理解している。
【やりきる力】 最後までやりきる 諦めない 粘り強い	好き嫌いで決められたことをやりきる。	決められたこと以外でもあきらめずにやりきる。	自分で決めた目標に向かって、粘り強く取り組む。	意図したことが分かるように正確に分りやすく伝え合っている。	意図したことを場面や状況に合わせて、簡潔に伝え合っている。	相手の理解の程度を推し量りながら、互いの考えを生かして伝え合っている。

3 実践事例

【探究的な学習の充実に向けての取組】

①鹿川小学校の実践

(ア) 第6学年単元 「Catch Your Dream!① ②」

江田島市の統計資料から、「少子高齢化による人口減少」という課題に気づき、グループごとに改善の手立てを考え、SNSを活用した情報発信に挑戦したり、市議会での提案を行ったりした。単元を通して、自身の「キャリア」について考え、将来の展望に思いを馳せることをねらった学習活動に取り組んだ。

【PDCAの繰り返しによる効果】

市役所や地域の方をゲストティーチャーとして招聘し、話を伺ったことで、大人の本音に触れることができ、児童が考える「理想」と社会の「現実」とのギャップに気づき、よりよい改善の手立てを考えることができた。また、改善策について、市議会アドベンチャーで発表したり、ゲストティーチャーの方に話を聞いていただいたり提案したりしたことで、児童自身が達成感を大きく感じる事ができた。

(イ) 第3～6学年共通単元 「自分タイム」

児童一人一人が興味をもつ事柄について、「課題の設定」「情報の収集」「情報の整理・分析」「まとめ・表現」の探究のサイクルを意識した個人探究学習に取り組んだ。

【PDCAの繰り返しによる効果】

児童自身が興味のあることを、自分なりに設定した活動

のゴールに向けて学習を進めるため、児童が生き生きと学習を進める姿が多く見られた。また、児童の思考を揺さぶる問いかけを行うことで、児童自身が課題や成果を見つめ直し、「もっと調べよう」や「こんなこともできそうだな」と学習過程を捉え直すことができた。

[個人テーマの実践]

「睡眠」「料理」「宇宙のしくみ」「海の危険生物」
「江田島の山から見える景色」「漫画ができるまで」

②中町小学校の実践

(ア) 第4学年単元「中町小☆きらきら☆プロジェクト～NTもあるくつなぎ隊～」

本単元は、自分たちの生活する地域が抱える課題から、誰もが住みよい地域にするために、今から自分たちができることを探っていくとする単元である。江田島市には、65歳以上の人口が約44%で、約2人に1人は高齢者である。地域住民の高齢化と核家族化により、「話す相手がいない」、「買い物やゴミ捨てが大変だ」、「掃除が難しい。」といった悩みを抱えながら孤独に暮らす地域の人が増加しているという課題がある。本単元は、児童がこうした課題を捉え、地域の人の孤独の解消に向けて、地域の誰もが集い交流できる「やさしい町づくり」を活性化していくことを通して、社会の課題解決に向けて主体的に取り組もうとする態度を育てようとするものである。

[PDCAの繰り返しによる効果]

地域の人のとの関わりや体験活動を通して、「人にやさしい町ってどんな町だろう。」「おじいちゃんやおばあちゃんはどうなことで困っているのかな。」「江田島市をよりよくするために、自分たちにできることは何かある。」といった流れで児童自身が課題を発見し、新たな知識を更新させていくことができた。その結果、児童一人一人が課題意識を明確に持ち、主体的に学習することができた。

また、情報収集やまとめ・表現の活動において、地域人材や関係機関と積極的につながることを通して、地域の課題の解決に向けて自ら取り組もうとする態度を育成することができたと考えられる。

[ICTの活用]

「Googleフォーム」を活用したアンケート調査により、即時集計及びグラフ化したり、「Googleジャムボード」を活用してグループの考えを即時共有、比較・分類したりすることで活動時間の効率化を図り、思考する時間を多く確保することができた。

また、他学年では、探究のグループごとに「Googleクラスルーム」を作成し、グループでの活動の活性化を図ったり、コロナ禍のため、直接会って話を聞くことが難しい地域の方でも、「Googleミート」によってオンラインで話を聞く機会を設定したりすることができた。

[児童の単元の振り返りより]

やさしいまちは、だれもが元気であるのだと思っていたけど、みんなが楽しくらすのだと気づきました。実際、体験（高齢者疑似体験）すると目が見えにくく耳も聞こえにくく、こしがまがり、大変でした。やさしい町にするために〇〇さんが言っていたあいさつが大切だと分かったので、これからはあいさつをいっぱいしたいです。

③ 能美中学校の実践

(ア) 第1学年単元「ここから始めようSDGs～江田島の海を変えていくために、自分にはどんなことができるかな～」

江田島市には、自然や伝統文化などの魅力も多くあるが、海洋ゴミの問題に直面していることを海辺の漂着物調査の結果から知り、地域の海の美しさを守るためには、どんなことができるのか、自分なりの解決策を考え、地域社会に向けて啓発する単元である。

「PDCAの繰り返しによる効果」

自分なりの課題解決や発信するための企画の段階で、何人も他者からの批評を受けることで、自分の考えの見直しや、他者の意見を参考に新たな視点で考えることができた。生徒達は、アウトプットを意識した学びを繰り返すことで、普段の生活の中で学んだことを活用していきたいという意欲を高めており、主体的な学びが促進したと考えられる。

[生徒の単元の振り返りより]

身に付いた力【主体性】【伝え合う力】

国語で「視点を変えて物事を見る」という授業があった後、国語の物語を見る時はそのような考えでたまに読んでいた。総合でも私たちが行っているSDGsでも、悪気があってゴミを捨てているわけじゃないかもしれないと考えると、色々な考えが思い浮かぶ。このように「たくさん考えを出し、そこから良い意見を出す」ということをこれからやってみたいと思う。

身に付いた力【やりきる力】

最初の方は、すぐあきらめてやめていたけど、3学期になって最後まで、粘り強く問題などに立ち向かえるようになった。あきらめなかったら自分の力が付くことがわかったから。

【個に応じた指導の充実】

- 一人一人の実態丁寧把握することで、それに合った指導計画や単元構想、指導形態などの指導方法を教師が工夫することができた。それにより、児童生徒は、豊富な言語活動を通して学びを深めることができた。
- 担任以外に副担任や研究推進リーダーを配置することで、T・Tの活用や学習形態の工夫により、一人一人の学びに応じたきめ細かな対応を図ることができた。

4 研究の成果と課題等

(1) 成果

- 児童生徒が「探究のサイクル」を体験的に理解することができた。
- 教師が研修や授業研究を通して、「PBL」について理解を深めることができた。
- 地域人材との連携が図れた。
- 校区内的小・小連携及び小中連携が図れた。
- カリキュラム・マネジメントを通して、各教科等とのつながりを意識した単元開発ができた。(各学年1単元の開発)

能美中学校独自の生徒アンケートでは、「小中9年間で育てたい資質・能力」の中で「主体性」及び「やりきる力」において、全体の肯定的評価が80%以上を示し、特に第3学年で「授業では課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。」が、72.2%から94.5%に大きく伸びた。

(2) 課題

- 児童生徒の興味・関心に基づいた学習課題の選定のための年間計画の見直し。
- より効果的なカリキュラム・マネジメントの実践。
- ルーブリックの質的向上。
- 学校を支援してくれる地域企業の発掘。

能美中学校独自の生徒アンケートでは、「伝え合う力」において、前期、後期のポイントの推移は上がっているものの、課題が見られる。「授業では自分の考えを積極的に伝えている。」については、全体の67.7%である。特に第1学年が53.2%と低い。しかし、「相手の込められた思いを大切にしながら話を聞くようにしている。」については、93.7%と肯定的評価が高いことから、「伝え合う力」の中でも、特に「発信すること」に課題があると考えられる。

(3) 今後の改善方策等

- 教員が継続的に連携・協働できる校区の組織づくりを行う。
- 小中9年間で育成したい資質・能力を基に、系統性をもたせたルーブリックの見直しをする。
- より効果的なカリキュラム・マネジメントを行うために、綿密な年間指導計画の見直しをする。
- 児童生徒の興味・関心を基にした学習課題の選定を行う。
- 教師が地域資源について研究し、地域人材との連携や開拓を進める。